

九州保健福祉大学

平成28年度  
健康管理センター活動報告書



九州保健福祉大学 健康管理センター

## はじめに

従来、健康管理センターは学生相談業務のみを担当していましたが、平成19年度より保健業務を加えることにより、学生相談室と保健室の2室構成となり、学生の心身の健康問題に総合的に対処できるようになりました。

教職員のみなさまには特定検診事業にご協力いただき感謝申し上げます。

遺伝、環境の異常またはその両方が関与してし疾病が発症するといわれます。皆さんに関係のある成人病は、生活習慣が問題視されています。

最近、行動遺伝学という学際的な学問（隙間学問）のことを耳にします。主に一卵性双生児を対象にして遺伝と環境（才能か努力か）の「両方」の影響を調べます。

日本では「親が高収入だと子どもの学歴が高い（貧しい家庭の子どもは良い教育を受けることができない。東大生の親は高収入?）」といわれますが、これが典型的な「環境決定論」です。行動遺伝学の双生児研究などによって、「知能が環境のみによって決まる」という仮説は完膚なきまでに否定されてしまいました。「相関関係があるからといって因果関係があるとはかぎらない」というのは統計学の基本です。たとえば、アイスクリームの売上げと水死者の数を調べると、どちらも季節によって同じように増減します。この相関関係から、「アイスクリームが水死の原因になる」という因果関係を導き出すひとはいないでしょう。親の収入と子どもの学歴にも同様の「擬似相関」があります。知能が遺伝するという事実を受け入れるならば、「知能の高い親は社会的に成功し、同時に遺伝によって子どもは高学歴になる」という因果関係ですっきり説明できます。

私たちは4~5個の劣性遺伝病の遺伝子を持っているといわれています。インブリーディング (inbreeding) ということばがあります。同系繁殖、近親交配、近親結婚のことです。近親結婚はおもしろくない遺伝上の問題をおこします。それでどこの国でもごく近い関係にある親族や同族の結婚を禁止しています。インブリーディングはそれほど危険なのです。桃太郎の話は、このインブリーディングを戒める教訓を含んでいるように思われます。オバアサンが川から桃をひろってくる、というのは、よそから嫁を迎えるという象徴でしょう。河を流れてきた桃というのは、縁もゆかりもない“流れものの女”です。“流れものの女”などとしては人々に受け入れられません。それで川を流れてきた桃と

しました。(あわれをとどめるのは、桃太郎の父親です。どこにも姿をあらわしません。おじいさんは、いるにはいますが、山へしば刈りに追いやられて、嫁えらびには口が出せません)。

乳がんや卵巣がんリスクが高くなる **RBCA1** と **BRCA2** という遺伝子の突然変異があります(この変異があると乳がんになるリスクが 80%まで上昇するという報告もあります)。ハリウッド女優のアンジェリーナ・ジョリーは、この **RBCA** 変異があるために乳房と卵巣を切除する手術を受けました。

確かに、ゲノム解析技術の進歩で、特定の疾患の原因遺伝子が同定されましたが、発見されたのは一部にすぎず、遺伝子変異ですべての病態を説明できるわけではありません。

私が専門にしている小児臨床遺伝学分野で、もしアンジェリーナ・ジョリーの両親が着床前診断(出生前診断の一種)を行い、生まれてくる子どもに **RBCA** 変異があることを知ったとしたら、その受精卵を子宮に戻すという選択をしたでしょうか。その受精卵では妊娠・分娩を行わないという選択をしたら、アンジェリーナ・ジョリーという大女優はこの世に誕生することはなかったかもしれません。

生物の誕生や生命現象の営みは、**DNA** 上に書き込まれた遺伝情報に基づいて行われます。ヒトの健康の維持・増進や変調にも遺伝情報の働きが関与します。この遺伝情報のスイッチの **ON/OFF** などの調節機構は、従来の遺伝学(ジェネティクス)の流れをくむ分子遺伝学では **DNA** 上の塩基配列に基づいて考察されてきました。これに対して「エピジェネティクス」は、「塩基配列に依存しない遺伝子機能の調節機構」です。具体的には、**遺伝子の働き**の **ON/OFF** の調節が、**DNA** の塩基配列自身ではなく、主として **DNA** 塩基へのメチル化修飾、**DNA** が巻き付いているヒストンタンパクへのメチル化、アセチル化修飾などの、いわゆる「**エピジェネティック修飾**」によって行われるという仕組みです。

エピジェネティック修飾変化の特徴として、まず塩基配列の変化なしに**遺伝子の働き**を **ON/OFF** する。外的な環境因子の影響を受けやすいこと(後生遺伝学)、次に突然変異(塩基配列の変化)より高い頻度で起ることが挙げられます。これらのことから、環境要因が**エピジェネティクス**を通して**遺伝情報**を変化させ、ヒトの健康や体質に変化をもたらす可能性が注目されてきました。

具体的には、私たちは年を取ると、**遺伝子の塩基配列**の変化は無いのに、白髪や皺が増えます。雷鳥の羽毛は夏は茶色ですが、冬には白くなります。

健康にとって不利な**エピジェネティクス**が起こらないような生活習慣を身につけたいものです。

最後にクイズです。一郎と次郎が夕食に出かけました。一郎はその日の夜中に、次郎は翌朝に具合が悪くなりました。二人がかかった病気はなんでしょう。

#### 参考文献

橘 玲：言ってはいけない 残酷すぎる事実. 新潮新書, 2016.

石原 理：生殖医療の衝撃. 講談社現代新書, 2016.

安藤寿康：遺伝子の不都合な真実 —すべての能力は遺伝である. ちくま新書, 2012.

平成 29 年 12 月

九州保健福祉大学  
健康管理センター長

園田 徹

# 目次

I. 組織構成ならびに構成員 . . . . . 1

II. 学生相談室の利用状況と今後の課題 . . . . . 2

III. 保健室の利用状況と今後の課題 . . . . . 4

IV. 附録

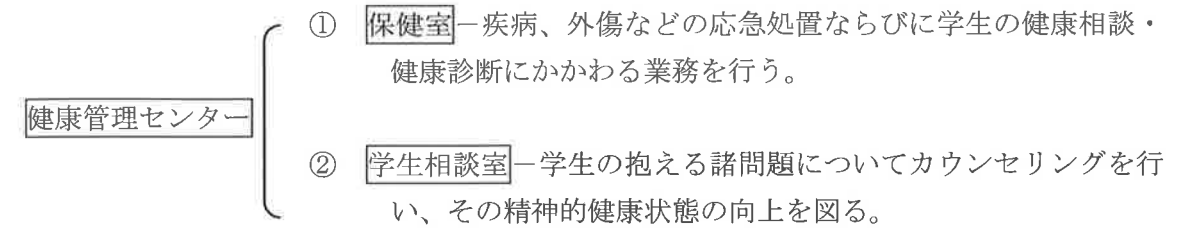
    1. インフルエンザについて . . . . . 8

    2. 学内 A E D 設置場所

## I 組織構成ならびに構成員

### 1. 組織構成

平成 18 年度までは、健康管理センターは主として学生相談のみを実施してきたが、平成 19 年度に機構改編を行い、従来の業務である学生相談業務に保健業務も加え、学生の心身の問題に包括的に取り組める体制となった。



### 2. 平成 28 年度構成員

構成員は以下のとおりであり、それぞれの専門領域に応じて学生相談室業務と保健室業務を分担して実施した。

- ・センター長 園田 徹
- ・専門委員 佐藤 圭創
- (学生相談) 田中 陽子
- 前田 直樹
- 内勢 美絵子
- 貫 優美子
- ・学生相談員 完岡 恭子
- ・事務職員 黒川 真舟 (学生課と兼務)

学生相談室の利用状況と今後の課題

1. 学生相談室の利用状況

平成28年度の学生相談室の利用者は実数合計47名、延べ数合計が123名で前年度よりも減少傾向にあった。相談件数は5月が最も多く、ついで6月、12月の相談件数が多くなっていた。28年度の特徴として、前年度相談件数の少なかった12月の利用が多かったという点あげられる。前年度は前期の相談件数が多かったが、28年度は後期の利用件数がかなり増えている。

相談内容は、「適応問題」と「健康問題」が多くなっている。「健康問題」に関しては、前期に比べて後期が明らかに減少していることから、問題への早期の対応が効果的に作用したのではないかと考えられる。しかしながら、「適応問題」は依然増加傾向にあり、特に後期に集中している。「適応問題」の多くは「対人関係の問題」であり、大学生の多くが対人関係の問題を抱えていると考えられる。また、前年度同様に、女子学生の相談件数が男子学生より多くなっており、女子学生が様々な問題を抱えて学生相談を利用していることが明らかになった。学部別では、社会福祉学部、薬学部の利用が多く、生命科学部の利用は非常に少なかった。学年別の利用者数では、1年次の利用が他の学年よりもかなり多く、前年度よりもその傾向が顕著であった。

2. 今後の課題

28年度は前年度に比べて学生相談室利用者が若干減少したが、前年度同様「適応の問題」に関する相談が最も多かった。近年、大学生の対人関係、コミュニケーション、社会的スキルの問題が指摘されている。SNSをはじめとするコミュニケーションツールの発達により、学生同士のコミュニケーションのパターンも変化し、またそれに伴う対人関係の問題が増加している。今後は、適切なコミュニケーションツールの使い方の指導や、社会的スキル向上を目指したSSTなども学生相談室でより積極的に行っていく必要がある。また、健康問題に関しても、精神疾患等で精神科に通院して服薬している学生も多く、今後、学生相談件数が大幅に減少する可能性は低い。したがって、健康管理センターは、これまで以上に支援体制を整え、問題の早期対応、早期解決を目指して様々な学生の問題に対して迅速に支援していく必要がある。

前田直樹

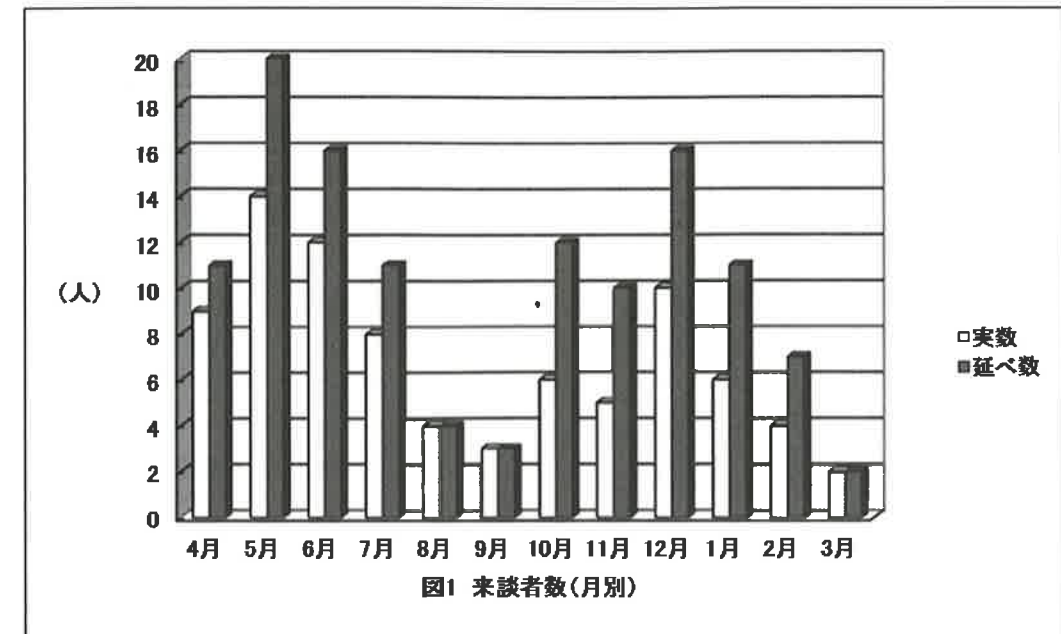
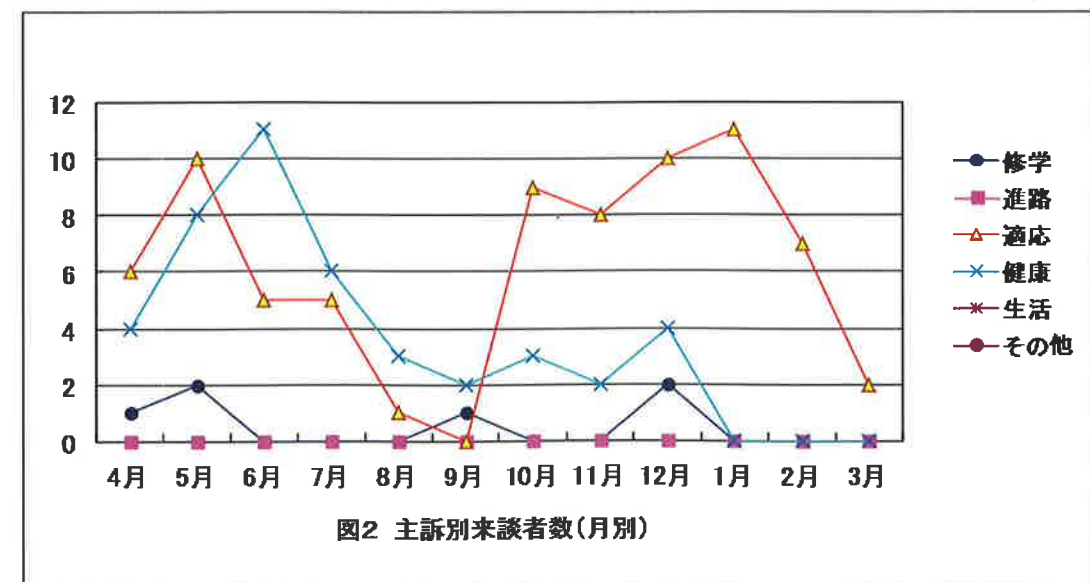


表1 学部別学年別来談者数(年間)

		1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	6年次	通信他	実数合計	延べ数合計
		社会福祉学部	男	1	0	2	3	0	0	0
	女	3	0	2	1	0	0	0	6	13
保健科学部	男	1	1	0	1	0	0	0	3	4
	女	4	1	2	1	0	0	0	8	27
薬学部	男	4	0	1	0	0	0	0	5	9
	女	4	1	4	1	1	2	0	13	25
生命医科学部	男	0	1	0	0	0	0	0	1	1
	女	3	2	0	0	0	0	0	5	12
合計	男	6	2	3	4	0	0	0	15	45
	女	14	4	8	3	1	0	0	32	78
	計	20	6	11	7	1	2	0	47	123



(前田 直樹)



### Ⅲ 保健室の利用状況と今後の課題

#### 1. 保健室の利用状況

平成28年度の保健室利用総数（累計）は505名（学生438名、教職員64名、その他3名）であり昨年度より約80名の減少であった。

所属別の利用状況は社会福祉学部28%、保健科学部29%、薬学部25%、生命医科学部（1.2年生のみ）5%となっていた。

昨年度に比べ社会福祉学部は減少し保健科学部は増加したが、今年度は生命医科学部以外はほぼ同数程度の割合である。教職員の利用は13%であった。（図3、表3）

月別、症状別の利用状況をみると前期は内科、外科の割合は同程度であるが後期に入ると例年同様、季節的に風邪や頭痛、消化器症状での利用が多かった。またメンタル不調（その他）を伴うベッドの利用も増加した。

インフルエンザの発生も昨年（約10名）よりは増加し報告者数は31名だったが一昨年ほどの感染拡大はみられなかった。外科症状での利用はこれも例年同様、通学途中のバイク等での転倒による外傷（打撲、擦り傷切り傷等の軽傷）が年度初めには多くみられた。

曜日別ではさほど大差はなく、時間別では1限目終了後の休憩時間、及び昼休み時間の利用が多かったが例年同様の傾向であった。

ベッド利用は、昨年度より睡眠目的での利用もベッドの空き状況によって容認し、時間を区切っての利用で対応したが昨年度よりも減少。また休養目的での利用は、大抵数回利用で終わるケースが多かった。メンタル不調に伴う体調不良での利用と思われた場合はベッドサイドで話を聞き学生相談室でのカウンセリングや心療内科への受診に繋いだケースもあった。（図4～8、表2）

#### 2. 今後の課題

本年度の利用者数は昨年度に比べ減少しているが体調不良を訴えて保健室を利用するには心の不調が隠れていることも少なくない。また体調不良でなくとも休憩や空き時間に居場所がないなどの理由で利用するケースも多い。学生世代特の生活環境の不慣れや、健康管理の意識の未熟さ、学業に追われながらのアルバイトの両立、対人関係など心身ともに疲労している状況の中で休養を取り心を落ち着けられる環境づくり、居場所作りが引き続き必要である。学生相談室、学生課や各学科とも情報交換を行い密に連携を取っていく必要があると考える。

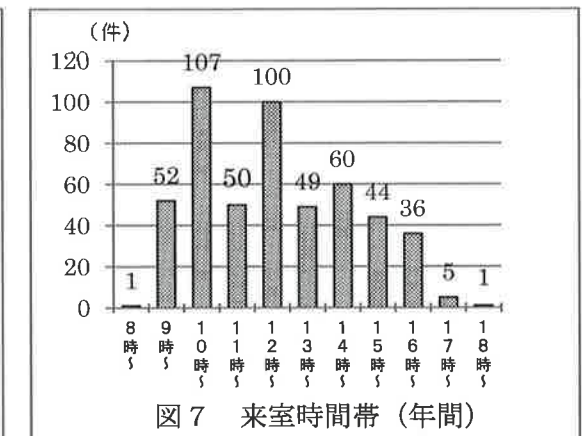
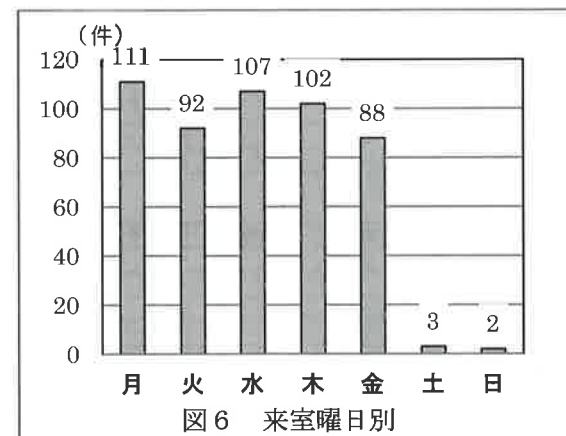
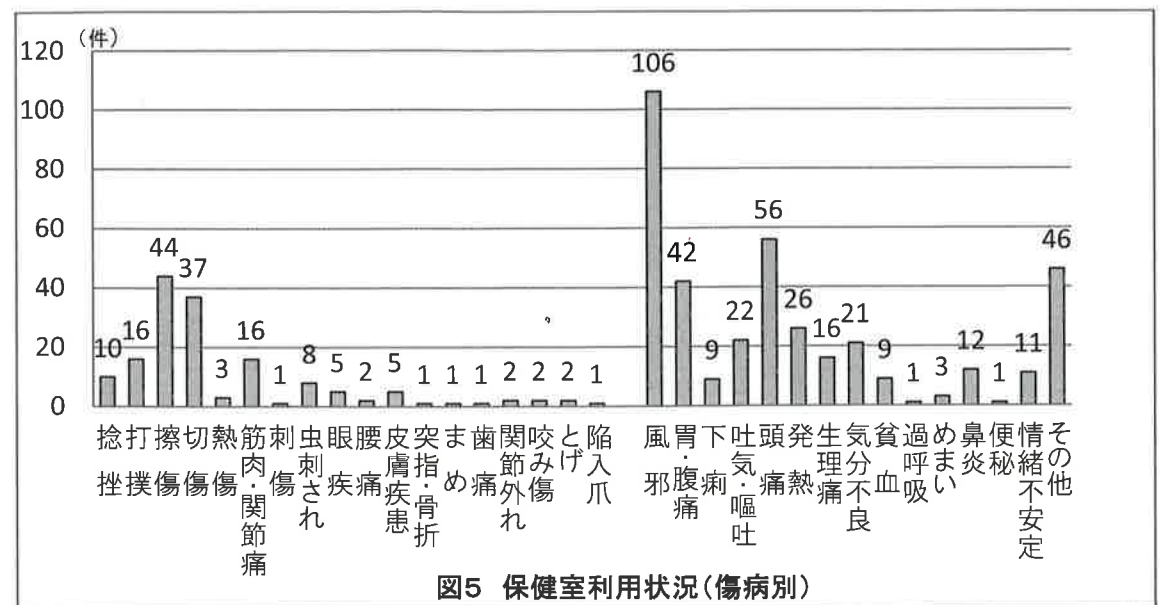
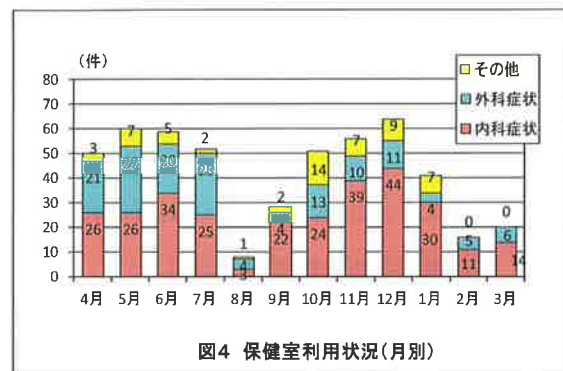
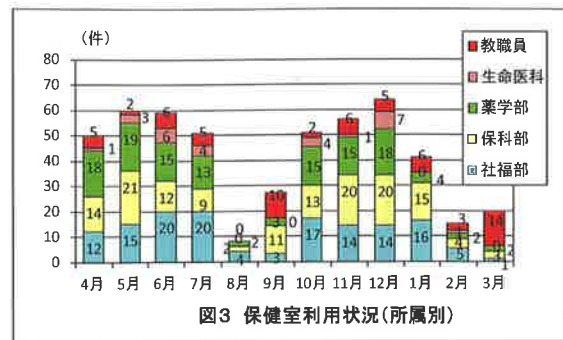


表2 ベッド休養処置・受診及び受診勧告件数

	休養	受診	受診勧告
4月	13	3	1
5月	15	3	1
6月	14	2	1
7月	15	2	1
8月	2	0	2
9月	7	0	0
10月	19	3	1
11月	12	2	0
12月	23	1	1
1月	6	5	2
2月	3	0	0
3月	2	1	0
計	131	22	10

※内科症状での休養者 109名/298名 (36.6%)

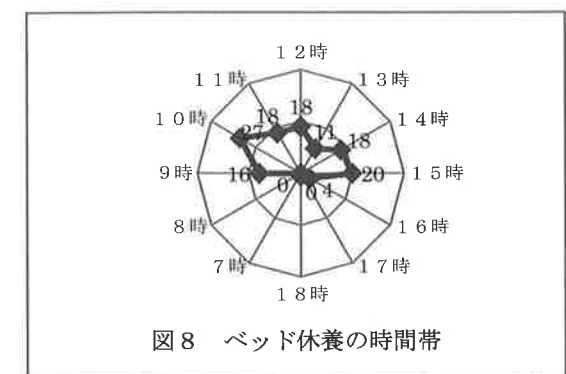


表 3 平成 28 年度 保健室利用状況

社会福祉学部

	内科症状		外科症状		その他		合計
	男	女	男	女	男	女	
4月	5	1	4	2	0	0	12
5月	3	2	4	3	3	0	15
6月	8	1	9	0	0	2	20
7月	8	0	5	5	1	1	20
8月	1	0	1	1	1	0	4
9月	0	0	1	1	1	0	3
10月	5	2	4	1	3	2	17
11月	4	4	2	1	3	0	14
12月	6	3	4	0	1	0	14
1月	8	3	1	2	1	1	16
2月	0	4	1	0	0	0	5
3月	0	0	1	0	0	0	1
合計	48	20	37	16	14	6	141

保健科学部

	内科症状		外科症状		その他		合計
	男	女	男	女	男	女	
4月	5	3	1	2	0	3	14
5月	2	9	5	3	0	2	21
6月	2	5	4	1	0	0	12
7月	4	3	1	1	0	0	9
8月	0	1	1	0	0	0	2
9月	7	3	0	0	0	1	11
10月	1	4	1	2	3	2	13
11月	8	5	3	2	0	2	20
12月	5	5	2	2	5	1	20
1月	5	6	0	0	3	1	15
2月	1	1	1	1	0	0	4
3月	0	1	0	2	0	0	3
合計	40	46	19	16	11	12	144

その他

	内科症状		外科症状		その他		合計
	男	女	男	女	男	女	
4月	0	0	0	0	0	0	0
5月	0	0	0	0	0	0	0
6月	0	0	0	0	0	0	0
7月	0	1	0	0	0	0	1
8月	0	0	0	0	0	0	0
9月	0	0	0	0	0	1	1
10月	0	0	0	0	0	0	0
11月	0	0	0	0	0	0	0
12月	0	0	0	0	0	0	0
1月	0	0	0	0	0	0	0
2月	0	1	0	0	0	0	1
3月	0	0	0	0	0	0	0
合計	0	2	0	0	0	1	3

総計(男女/症状別)

	内科症状		外科症状		その他		合計
	男	女	男	女	男	女	
4月	18	8	12	9	3	3	50
5月	10	16	16	11	3	4	60
6月	17	17	15	5	0	5	59
7月	14	11	12	13	1	1	52
8月	1	2	2	2	1	0	8
9月	10	12	1	3	1	1	28
10月	11	13	8	5	6	8	51
11月	16	23	6	4	5	2	56
12月	17	27	7	4	6	3	64
1月	17	13	2	2	4	3	41
2月	2	9	3	2	0	0	16
3月	7	7	4	2	0	0	20
合計	140	158	88	62	27	30	505

薬学部

	内科症状		外科症状		その他		合計
	男	女	男	女	男	女	
4月	6	4	4	4	0	0	18
5月	4	3	6	4	0	2	19
6月	3	4	1	4	0	3	15
7月	0	2	5	6	0	0	13
8月	0	1	0	1	0	0	2
9月	1	2	0	0	0	0	3
10月	3	6	2	2	0	2	15
11月	3	8	1	1	2	0	15
12月	3	12	1	1	0	1	18
1月	1	3	0	0	0	0	4
2月	0	1	0	1	0	0	2
3月	0	2	0	0	0	0	2
合計	24	48	20	24	2	8	126

生命医科学部 (1,2年生のみ)

	内科症状		外科症状		その他		合計
	男	女	男	女	男	女	
4月	1	0	0	0	0	0	1
5月	0	1	1	1	0	0	3
6月	1	4	1	0	0	0	6
7月	1	1	1	1	0	0	4
8月	0	0	0	0	0	0	0
9月	0	0	0	0	0	0	0
10月	1	1	0	0	0	2	4
11月	0	1	0	0	0	0	1
12月	0	6	0	1	0	0	7
1月	0	0	0	0	0	0	0
2月	0	1	0	0	0	0	1
3月	0	0	0	0	0	0	0
合計	4	15	3	3	0	2	27

教職員

	内科症状		外科症状		その他		合計
	男	女	男	女	男	女	
4月	1		3	1	0	0	5
5月	1	1	0	0	0	0	2
6月	3	3	0	0	0	0	6
7月	1	4	0	0	0	0	5
8月	0	0	0	0	0	0	0
9月	2	7	0	1	0	0	10
10月	1	0	1	0	0	0	2
11月	1	5	0	0	0	0	6
12月	3	1	0	0	0	1	5
1月	3	1	1	0	0	1	6
2月	1	1	1	0	0	0	3
3月	7	4	3	0	0	0	14
合計	24	27	9	2	0	2	64

総計(所属別)

	社福部	保科部	薬学部	生命医科	教職員	他	合計
4月	12	14	18	1	5	0	50
5月	15	21	19	3	2	0	60
6月	20	12	15	6	6	0	59
7月	20	9	13	4	5	1	52
8月	4	2	2	0	0	0	8
9月	3	11	3	0	10	1	28
10月	17	13	15	4	2	0	51
11月	14	20	15	1	6	0	56
12月	14	20	18	7	5	0	64
1月	16	15	4	0	6	0	41
2月	5	4	2	1	3	1	16
3月	1	3	2	0	14	0	20
合計	141	144	126	27	64	3	505

(完岡 恭子)

# IV 付 録

## 1 インフルエンザについて

薬学部教授、健康管理センター委員

佐藤 圭創

## 2 AED 設置マップ

# インフルエンザについて

インフルエンザは、2009年の新型H1N1pdmの大流行以来、重要な感染症と位置付けられ、その感染対策は重要である。

また、2013年から、中国で人感染が報告され、高い致死率と哺乳類への感染適合兆候が出てきているH7N9鳥インフルエンザが近い将来、ヒト型となり、大流行を起こす可能性が高いといわれている。

このような背景から、インフルエンザについて、本稿で、その情報・知識をこの機会に整理することにした。

九州保健福祉大学・薬学部・臨床生化学講座教授

九州保健福祉大学・健康管理センター委員（医師・産業医）

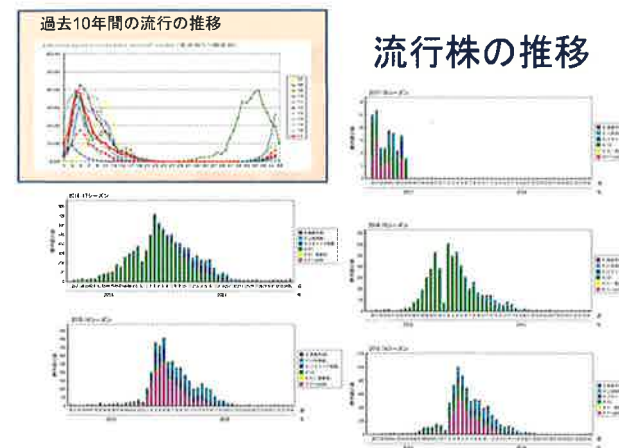
佐藤 圭創

## インフルエンザ

- インフルエンザウイルスによる感染症
- A, B, Cの3型あり。(流行するのは、A型とB型)
- 普通のかぜとインフルエンザは、疾病としては全く違うもの
- A型ウイルスの表面: HA(赤血球凝集素)とNA(糖タンパク)のスパイクあり
- A型(HA, NAが抗原性変化する⇒免疫機構からのエスケープ)
- A型(連続変異⇒小流行、不連続変異⇒大流行)
- 急に発症する38度以上の発熱、頭痛、関節痛、筋肉痛
- 加えて、咽頭痛、鼻汁、咳などの症状
- 重症化することがある
- 流行性疾患(冬季に流行する)、昨年(2016-17)患者数1600万人
- インフルエンザウイルスは、低温、乾燥を好む
- 感染経路は、飛沫感染
- 大多数の人では特に治療を行わなくても1-2週間で自然治癒
- 季節性と大流行する新型(2009pdmなど)あり
- 乳幼児、高齢者、基礎疾患をもつ人では、気管支炎、肺炎などを併発
- したり基礎疾患の悪化を招いたりして、最悪の場合死に至る(超過死亡)。

8本の文節RNA 簡単に交換される = 変異しやすい

インフルエンザの重症化や合併症を防ぐことは非常に重要

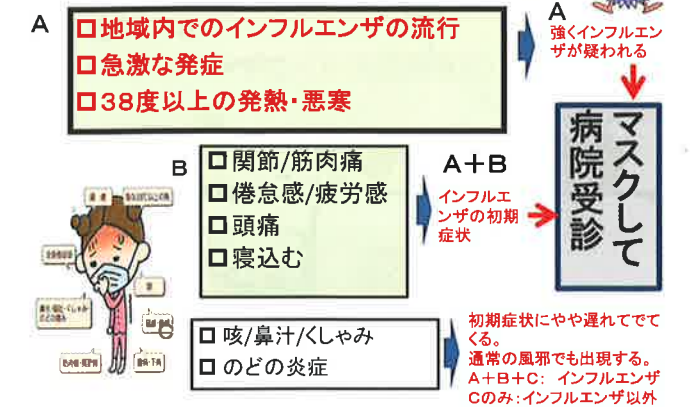


今年(2017-18)は、Aソ連+Bの混合パターンか?

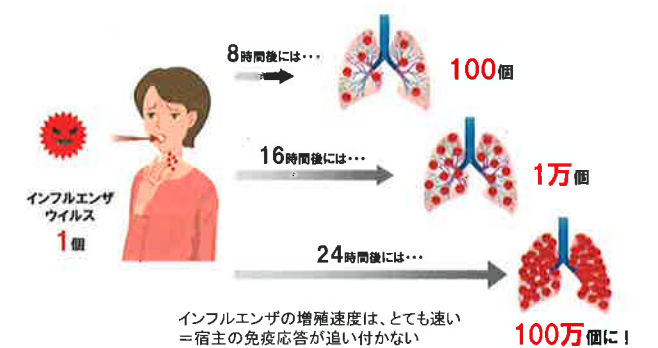
## 今年のインフルエンザの特徴

- 9~10月に、昨年の5倍の感染報告あり。
- 今年(2017-18)は、A香港+Aソ連+Bの混合パターンか？(昨年A香港、一昨年Aソ連+B)
- 例年より感染のピークが早いかもしれない。
- 早めの予防・対策が大切
- ワクチン不足傾向にある(2752万本、5500万回分、昨年より10%減、昨年の累計使用料2565万本)。足りるはず...
- ワクチン株(2017-18)
  - A/Singapore/GP1908/2015(IVR-180)(H1N1)pdm09
  - A/Hong Kong/4801/2014(X-263)(H3N2)⇒これがうまく増えなかった
  - B/Phuket/3073/2013(山形系統)
  - B/Texas/2/2013(ベクトリア系統)
- 薬剤耐性:本年度分離株は、NA阻害剤耐性株少ない
- アマンタジン耐性は、昨年同様(100%耐性)

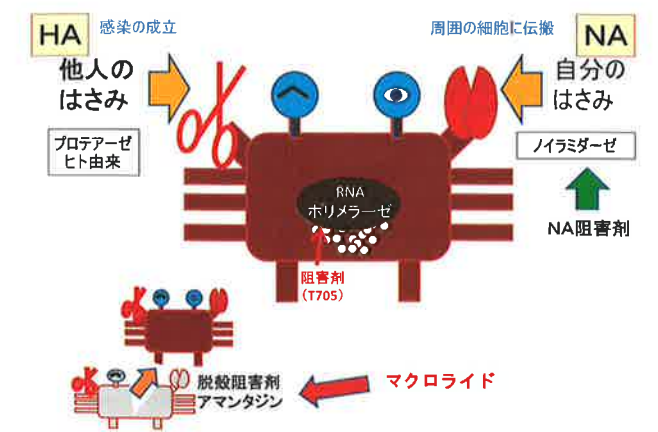
## インフルエンザチェック項目



## インフルエンザウイルスの増殖速度

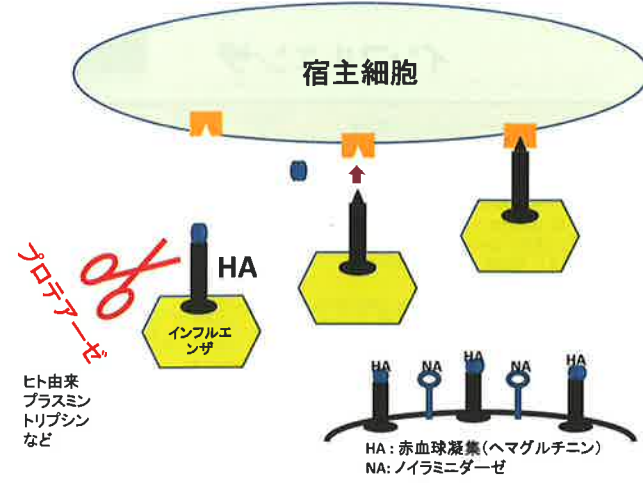
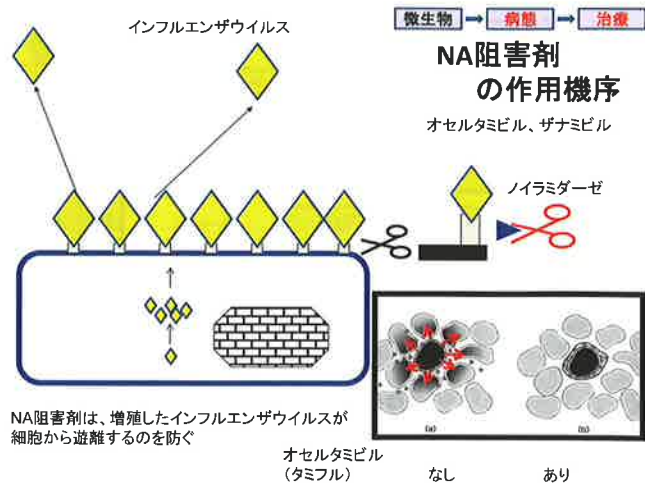


【参考】岡田 雅彦 著「新型インフルエンザ対策」43巻号 2009年 054



インフルエンザウイルスは二つのはさみを使っている





**ダニのプロテアーゼがインフルエンザを活性化**

**Potentiation of Infectivity and Pathogenesis of Influenza A Virus by a House Dust Mite Protease**

Takaaki Akaike, Hiroshi Meeda, Ketshi Maruo, Yoshihumi Sakata, and Kunzo Sato  
Department of Microbiology, Kumamoto University School of Medicine, Kumamoto, Japan

Common house dust mites (e.g., *Dermatophagoides farinae*) excrete a serine-type (Df) protease. Df protease obtained from cultured mites enhanced viral replication in vitro via proteolytic cleavage of viral hemagglutinin (HA) into HA1 and HA2, which confers potent viral infectivity. Its potency is 2- to 5-fold higher than bovine trypsin or human plasmin. Df protease also markedly accelerated virus propagation in vivo: A minute quantity of protease (estimated delivered amount, 0.8-3.2 µg) produced ~4- to 100-fold increases in infectious virus in the mouse lung. Similar augmentation of viral replication by Df protease was observed in ferret models of nasopharyngeal infections of influenza virus. All extracts from ordinary house dust contained a serine-type protease that cleaved HA into HA1 and HA2. Thus, mite protease in house dust may enhance the pathogenesis of influenza virus.

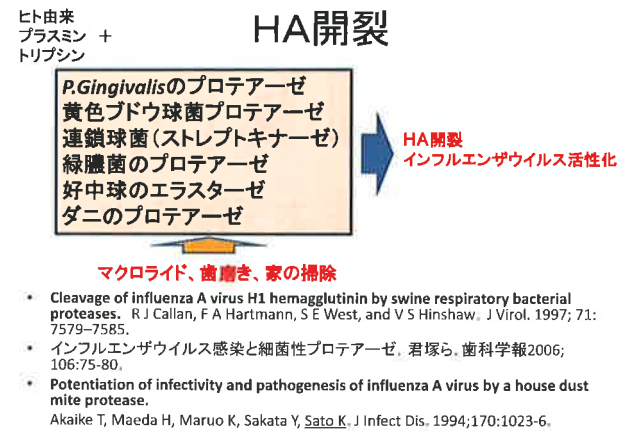
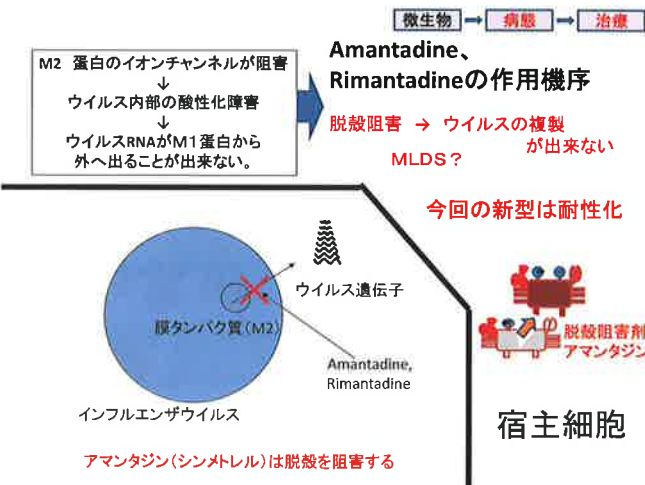
The Journal of Infectious Diseases 1994;170:1023-6

**Df-プロテアーゼ**

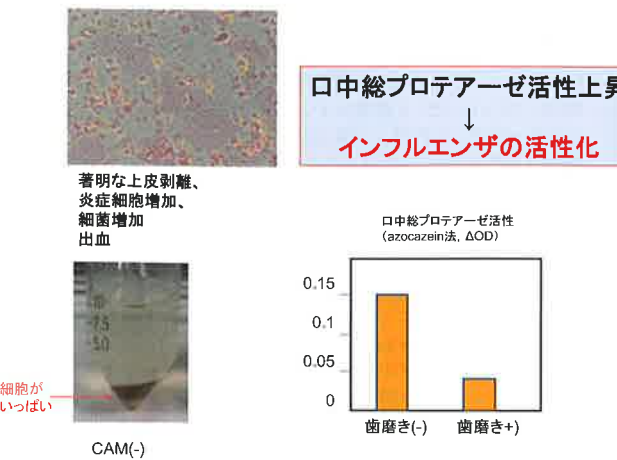
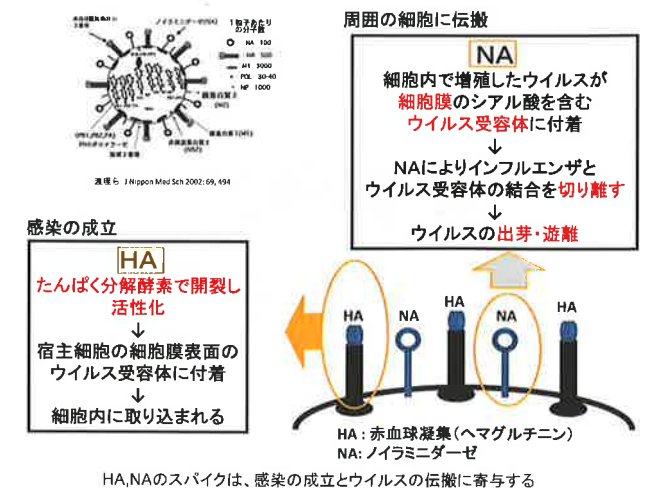
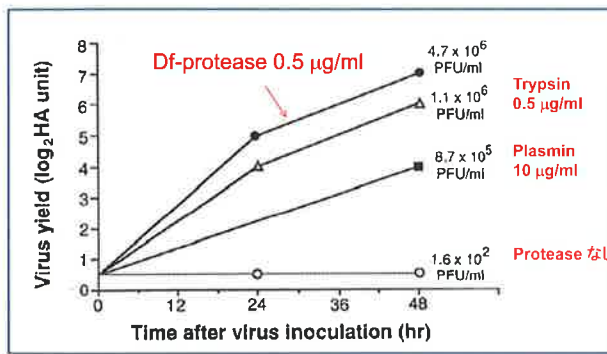
- インフルエンザウイルスの活性化
- 喘息などのアレルギーの原因抗原のひとつ

喘息の人がインフルエンザ増悪しやすい原因のひとつ???

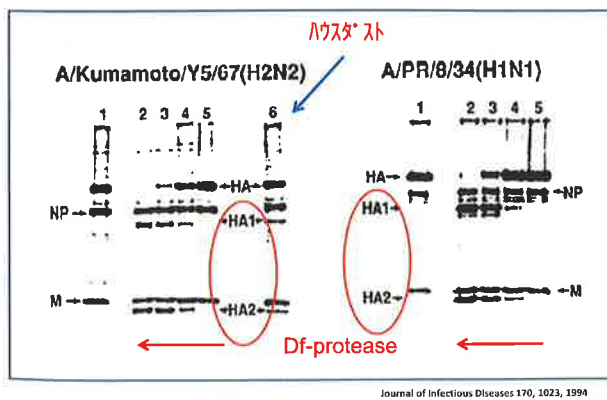
免疫学的な機序以外にも可能性



**Df-protease のウイルス複製効果**



**Df-proteaseによるHA開裂**



**インフルエンザは空気感染 (飛沫核感染) するのか?**

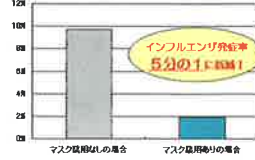
- 基本的にインフルエンザは**飛沫感染**です。マスクは有用
  - 特別な条件\*のもとでは飛沫核感染(空気感染)もあるといわれています。
- 飛沫感染** >> 空気感染(飛沫核感染)
- \*狭い気密な部屋などでは、比較的長くウイルスが浮遊することもあり得る(飛沫核感染)ので、時々換気をし、部屋の湿度を適度に保つことなどは意義があります。

## インフルエンザの感染制御(自発的感染予防)



- ✓ 栄養と休養を充分にとる
- ✓ 人混みを避ける
- ✓ 適度な湿度を保つ
- ✓ 外出後の手洗いうがいの励行
- ✓ マスクを着用する(加湿、手指の接触防止)
- ✓ 換気をする

＜マスク着用率による、子どものインフルエンザ感染率の違い＞

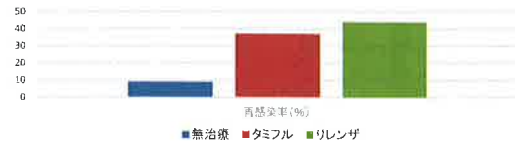


ユニチャーム、関西医科大学と共同でマスクにより子どものインフルエンザ発症率を5分の1に低減できることを実証

## 季節性インフルエンザ: 薬を使わないという選択!

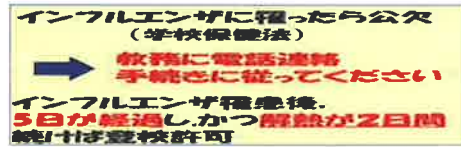
- 健康人では、**自然治癒**する疾患
- NA阻害剤を早期に使用すると、せつかく感染したのに、**抗体価が上がらない**
- ⇒ 同じウイルス株に2度目、3度目の再感染もあり得る
- H7N9の**新型流行**に少しでも対応できるように**免疫能を上げておくことも重要**

前年度のインフルエンザ治療による翌年の再感染率の差



## 職場・学校・家庭で 感染を予防するには?

- 空気が**乾燥**するとインフルエンザにかかりやすくなるので、部屋の中を加湿器などで**適度な湿度(50~60%)**に保ちましょう。
- 空気が**こも**っていると、ウイルスが比較的長い時間空气中を漂っていることがあるので、**換気**も忘れずに。(希釈効果)
- うがいや手洗いをこまめにする**ことも予防につながります**。
- インフルエンザにかかって**症状がある間は**、まわりの人につまさないためにも、**マスクを着用**しましょう。



## 新型インフルエンザの大流行が来る?

### 鳥インフルエンザ、哺乳動物で飛沫感染 ハンデミックの可能性 東大など研究

【東京】鳥インフルエンザウイルス(H5N1)が哺乳動物で飛沫感染し、感染源は水鳥に由来することが明らかになった。フェレットを使った実験で明らかになった。フェレットは水鳥のウイルスに感染し、飛沫感染させることができた。これは、哺乳動物間で飛沫感染が起きる可能性を示している。

【東京】鳥インフルエンザウイルス(H5N1)は、哺乳動物の感染源として「飛沫感染」が確認された。鳥インフルエンザウイルス(H5N1)は、哺乳動物で飛沫感染し、感染源は水鳥に由来することが明らかになった。フェレットを使った実験で明らかになった。フェレットは水鳥のウイルスに感染し、飛沫感染させることができた。これは、哺乳動物間で飛沫感染が起きる可能性を示している。

### 新型インフル疑い患者が神戸港に 規定で対策訓練

【神戸】新型インフルエンザの疑い患者が神戸港に到着した。神戸市は、規定で対策訓練を行った。神戸市は、新型インフルエンザの疑い患者が神戸港に到着した。神戸市は、規定で対策訓練を行った。神戸市は、新型インフルエンザの疑い患者が神戸港に到着した。神戸市は、規定で対策訓練を行った。

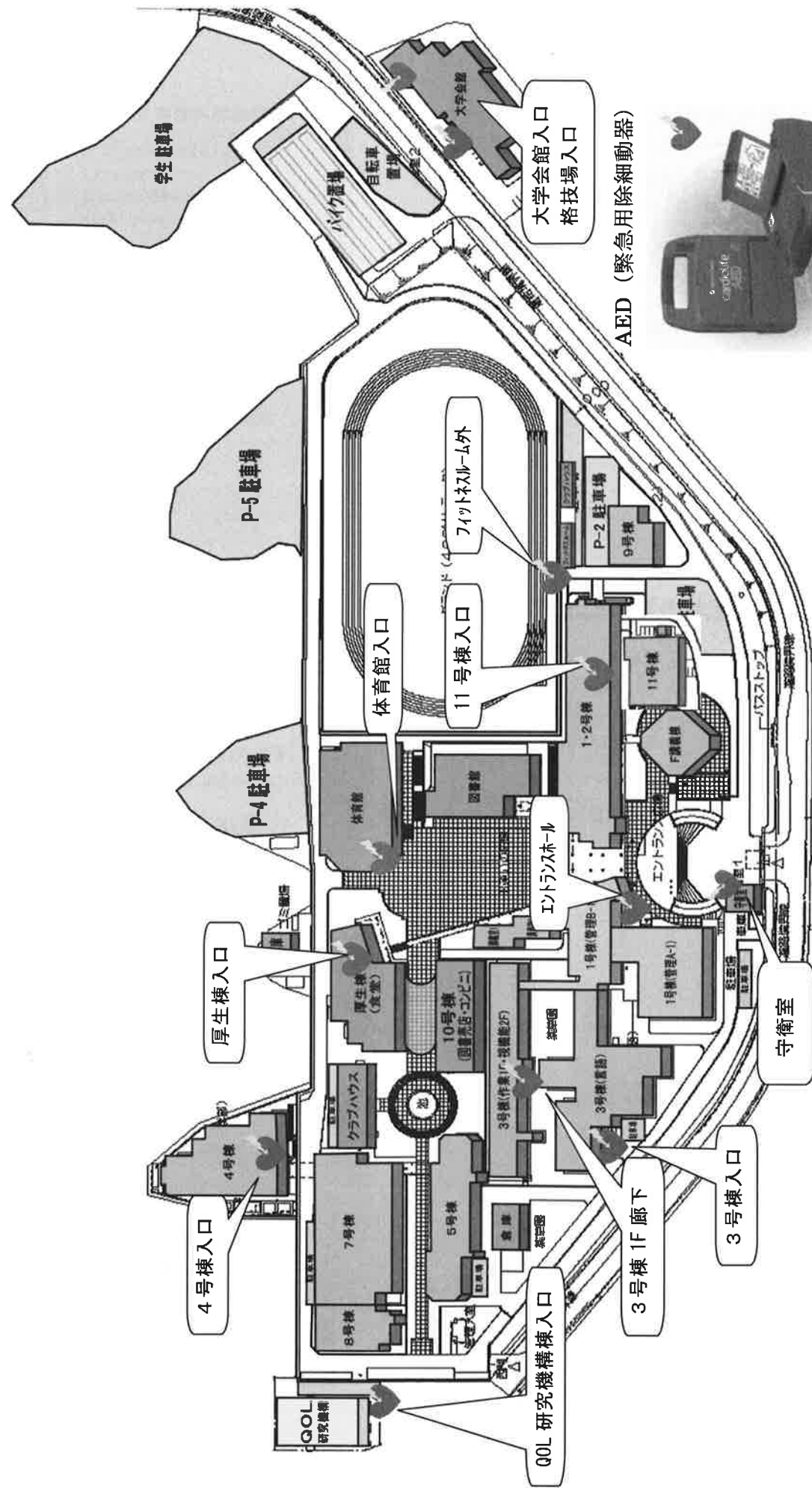
## インフルエンザワクチンの意義

- 現在のワクチンは、**HA**に対する**スプリットワクチン(不活化ワクチン)**
- 孵化鶏卵でウイルスを増やすので、**卵アレルギー×**
- **IgA抗体誘導しない=粘膜免疫強化できない**  
= 感染予防に対しては問題あり
- **IgG抗体誘導する=体内に入ってから機能する**  
= 重症化抑制
- 将来的には、**IgA抗体が誘導できる、粘膜免疫可能なワクチン**が望まれる(現在開発中)

## インフルエンザA(H7N9)ウイルス

- 鳥の間で循環しているインフルエンザウイルス(鳥には低病原性)
- H7亜型ウイルスのサブグループ(H7N2、H7N3およびH7N7)の人への感染の報告は過去にもある。
- H7N9ウイルスは今回初めて。
- H5N1より飛沫感染、空気感染しやすい(フェレットの実験で確認)
- H7N9ウイルスは、季節性よりヒトで増えやすい性質を持つ。
- ヒトの受容体に認識されやすくなるアミノ酸変異株、哺乳類の細胞で増殖効率が上がる変異株が発見⇒大流行(パンデミック)が起こる可能性高い(東大、国立感染症研究所、ウイスコンシン大)
- 2013年以降中国で1589人が感染、616人が死亡(致死率38.8%)
- 低病原性のウイルスが抗病原性に変異した。
- 症状:発熱、咳、息切れ+重症肺炎ARDS(上気道α2,6&下気道α2,3のレセプターのどちらにも適合、上<下)
- 肺でのウイルスの増殖力は、季節性の1000倍以上。
- 今のところ、有意なヒト-ヒト感染はない?(鳥との接触による感染)
- ウイルスの遺伝子解析の結果:ウイルスは鳥由来であるものの、哺乳動物に適応の兆しを見せている。(RNAポリメラーゼの最適温度、ヒト型レセプターへの結合能力)
- Arg 292-Lys 変異(NA阻害剤耐性): 中国内で耐性株増加
- 感染後、肺、脳で増殖
- 血液、便、尿からも分離(ウイルス血症を伴う)
- 本年~来年のインフルエンザシーズンに注意必要

# AEDマップ



九州保健福祉大学  
 平成28年度 健康管理センター 活動報告書  
 平成29年12月発行  
 表紙装丁 完岡 恭子  
 写真 秋葉 敏夫 (通信教育部 部長)  
 表紙の花 アキノペニバナサルビア (シソ科)  
 発行者 九州保健福祉大学健康管理センター  
 〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町 1714-1  
 TEL 0982-23-5555 (代表)  
 印刷所 明巧堂印刷株式会社  
 〒882-0063 宮崎県延岡市古川町 82-10  
 TEL 0982-33-6327





九州保健福祉大学  
平成 28 年度  
健康管理センター 活動報告書